

基本理念(ビジョン)

明石の「歴史と文化」の拠点、市民をつなぐ博物館

(考え方)

ぶんぱくが開館した1991年、明石市では、「文化」を人の営み全般と広く捉えていました。そして、ぶんぱくは、本市の文化財に関する調査・研究をする場、それらを保存・公開する場、市民の文化創造意識を喚起し、文化創造の活動の場として設立されました。

(資料1及び資料2 参照)

開館して30年以上が経ち、市民がより「ぶんぱく」を愛し、何度も来館してもらえる「ぶんぱく」になるために必要なことを検討することを目的に、2024年度より「ぶんぱくあり方検討会」「職員意見交換会」「市民ワークショップ」を開催したところ、「あかしの文化と歴史を守り、伝える博物館」「市民による歴史や自然の学びの拠点」という博物館本来の役割や「博物館を通じていろんな人のつながりが生まれる」「地域のハブとなる」などのまちの魅力を高めるための役割を求める声がありました。(資料3 参照)

本市では、「ぶんぱく」が市民に愛され、多くの方に何度でも来館していただけるよう、文化財、生活文化のほか、芸術、伝統芸能、自然分野なども含めた、「歴史」と「文化」の2つを柱に、市民に開かれた博物館を目指していきたいと考えています。

さらに、「あかしSDGs推進計画(明石市第6次長期総合計画)」「明石文化芸術創生条例」「明石文化芸術基本計画」「明石市文化財保存活用地域計画」「明石市生涯学習ビジョン」「明石市立文化博物館条例」等、ぶんぱくに関する条例や計画での本市におけるぶんぱくの位置づけを踏まえ(資料4 参照)、

基本理念(ビジョン)を

明石の「歴史と文化」の拠点、市民をつなぐ博物館 と決めました。

基本理念(ビジョン)の実現には、以下の2つのことが必要と考えます。

(ぶんぱくの機能と役割)

- (1) ぶんぱくが博物館に必要な固有の機能を持つ(機能)
- (2) ぶんぱくが明石市の博物館としての役割を果たす(役割)

ぶんぱくの機能と役割

(1) ぶんぱくが博物館に必要な固有の機能を持つ（資料5 参照）

博物館としての基本的な活動である、資料の収集・整理・保存・調査・研究・展示・教育普及(コミュニケーション)を、だれにでもやさしい博物館としての視点で、安定的・継続的に行います。

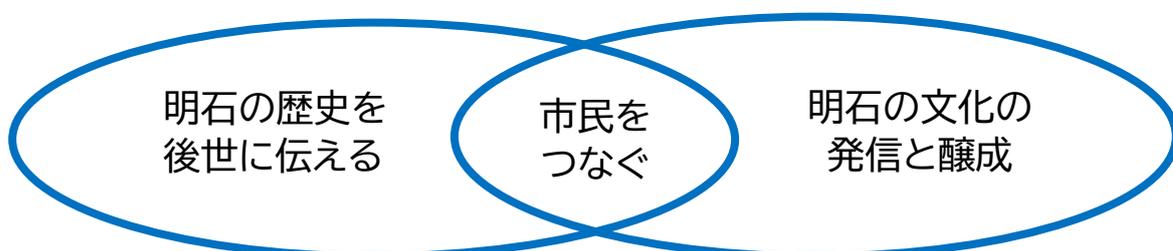
博物館としての固有の機能を持つために必要な取り組み

- (1) 博物館活動を安定的・継続的に行うための運営体制の見直し
- (2) 専門性を支える人材の確保と育成
- (3) 博物館活動に必要なスペースの確保
- (4) 「登録博物館」への移行

(2) ぶんぱくが明石市の博物館としての役割を果たす

現在の社会情勢や市全体の取り組みのなかで、ぶんぱくがどのような役割を果たすのか、また、その基本方針(方向性)について、これまでに実施した市民ワークショップ、来館者アンケートなどの意見を参考にまとめました。

ぶんぱくの役割



役割1 明石の歴史を 後世に伝える

市民・来館者の声

- 明石の伝統産業の歴史は、今調査しないと残らない(市民)
- 明石城のことをもっと知りたい(来館者)
- わかりやすい、やさしい言葉や方法で展示してほしい(来館者)
- 中高生や若い世代の来館者が少ない(来館者集計より)
- 出張展示や資料の貸出はないですか(市民)
- ぶんぱくに行かないとどんな資料があるかわからない(市民)

基本方針1

明石の歴史を後世に伝えるため、資料の保存や展示、教育活動を通じて歴史的価値を継承していきます。

主な取り組み

- (1)すべての人にわかりやすい企画展等の実施
- (2)博物館の収蔵資料の現状調査と整理、方針策定、情報登録、デジタル化と公開
- (3)出張展示・アウトリーチ事業の充実

役割2 明石の文化の 発信と醸成

市民・来館者の声

- 子どもと一緒に楽しくアートを楽しみたい(来館者)
- 近くで素晴らしい芸術作品が観られてうれしいです(来館者)
- 高校生や大学生の作品をもっと見てみたい(来館者)
- 来館記念になるグッズがあるといい(来館者)
- 明石発の産業や企業を紹介してほしい(市民)
- 私の作品をちょっと見てもらえる場所が明石にはない(市民)

基本方針2

明石の多様な文化を発信し、新たな文化を醸成します。

主な取り組み

- (1)博物館や文化への理解をひろげる特別展の実施
- (2)市内企業等とのコラボ・連携
- (3)市民の創作・研究成果の発表への支援

役割3 市民をつなぐ

市民・来館者の声

- 博物館が好き。博物館で何か活動をしたい(市民)
- 博物館でゆっくり過ごしたい(市民)
- 博物館好きな人とつながりたい(市民)
- ぶんぱくのファンをもっと増やしたい(ぶんぱく)
- 子どもが博物館でできることはないですか(市民)

基本方針3

「歴史と文化」の拠点として、これまで出会わなかった人々が出会い、学び、交流する場となることで市民の文化的な豊かさを育みます。

主な取り組み

- (1)市民が博物館の運営に関わることができる仕組みの構築
- (2)体験プログラムの実施
- (3)くつろぎ・交流・キッズスペースの整備

ぶんぱくが博物館に必要な固有の機能を持つ上での課題

(1) 博物館活動を安定的・継続的に行うための運営体制の見直し（資料6 参照）

【現状】指定管理者制度を導入し、指定管理期間ごとに指定管理者の選定を行っている。博物館業務の一部を市直営とする業務分割方式を採用しているため、ぶんぱく内に複数の指揮命令系統が存在している。

- 人員と運営体制の確立は最優先事項である。
- 博物館の全体(博物館活動だけでなく、建物、所蔵品、予算申請及び執行、職員の指揮命令)の権限を持つ統一的な指揮命令系統(館長などの執行部)を確立する必要がある。
- 館長は博物館に精通している人物が望ましいが、同時に行政的な実行力も必要である。館長と副館長などのチームで執行部を形成することも必要だろう。
- 20～30年程度の長期間を見定めた運営体制と、柔軟な人材登用が可能な運営体制を確立する必要がある。選択肢としては、ア)直営、イ)地方独立行政法人、ウ)特命による長期指定管理などの手法がある。
- 運営体制の見直しによる博物館での指揮命令系統の一元化で、文化財行政や市史編さん業務に支障がでるのであれば、それらの業務における博物館の位置づけの見直しを行うなど、抜本的な業務再編が必要である。
- 市職員(市史編さん担当、文化財保護担当、平和教育担当)、指定管理者、さらに市美術展などを企画する文化国際創生財団という縦割りになったぶんぱくをとりまく組織に「横串」を入れる会合が必要。
- 魚住文化財収蔵庫では、埋蔵文化財に関する展示、資料整理などを行っているが、ぶんぱくとの機能分化、役割分担をしっかりとすることで、運営体制が確立する。
- 経営体制の移行の際には天文科学館と共有できる人的資源の確保も予想されることから、同館の経営に悪影響を与えないよう検討しながら、考慮することも必要。
- 明石市内のもうひとつ博物館である天文科学館との連携はキーポイントである。その連携をどうしていくのか。天文科学館のビジョンとぶんぱくのビジョンとの整合性はどうか。展示施設として、魚住文化財収蔵庫を含めて全体のビジョンが必要。
- 施設の老朽化の対策や、長期的な方向性が必要。
- ぶんぱくに求める役割は多様だが、ぶんぱくだけで全てやるのは難しい。ぶんぱくの機能を市全域、広域に広げ、機能を点在させることも考えられる。その結果、パピオスあかし(市民広場、図書館、あかし子育て支援センター、親子交流スペース、中高生世代交流スペース)や、天文科学館などの文化施設、旧市民図書館、新市役所など、関連のある場所を联合体として考えていければよい。

(2) 専門性を支える人材の確保と育成（資料7 参照）

【現状】明石の歴史や民俗等を紹介する企画展を担当する市学芸員については、正規職員が1名、任期付職員4名となっている。特別展や広報など、企画展以外の業務は指定管理者職員（任期付）が担当している。

指揮命令系統の違いにより、市学芸員と指定管理者学芸員との業務交流が少なく、互いの業務に対する知見を広げること、学芸業務の共同実施が進んでいない。

- 博物館を長期的視点で継続的に考える職員がいない。無期雇用の正規職員がほとんどおらず、年次雇用および指定管理の有期雇用の職員が大半を占める。さらに新規職員を雇用しても、それを育成する体制がない。
- 行政職員機構の中で、博物館学芸員のように専門性を持つ人材の位置づけは難しく、以前より年次雇用や指定管理者採用など正規採用の枠外に置かれてしまう場合が多い。しかし、これでは博物館の専門性の持続的な維持が難しく、将来の管理職育成も難しい。雇用の安定が望めない状態では人材獲得も難しい。
- 新たな分野の学芸員展開は活動計画と両輪で進める必要がある。まずは外部機関との連携や嘱託専門員や兼業学芸員など柔軟な形から始めても良い。
- 採用する学芸員の分野については十分な議論が必要である。ぶんぱくをどのような博物館にするのか、その分野や資料収集方針に沿った人材採用・育成が必要である。
- 人材を確保した後の育成プログラムも重要である。国や学会、大学などの先進的団体が実施している研修への継続的な派遣が効果的である。常に外部の空気を取り入れながら、明石市内の学習の場をぶんぱくが率先して作ってほしい。
- 展覧会活動の充実には、学芸員に博物館研究を深める必要がある。基礎研究の重要性の認識と、その体制整備が必要である。
- 博物館の職員がスキルアップするためには館外の機関との共同研究や展示活動も一つの可能性である。職員と組織のノウハウ獲得に主眼を置いた無理のない連携活動を目指したい。まずは人のつながりから始めてはどうか。魚住文化財収蔵庫の展示との交流、県立考古博物館との共同展示なども考えられる。

(3) 博物館活動に必要なスペースの確保

【現状】文化博物館の収蔵庫については、新規資料を収蔵する余裕がない状態が続いている。2022年に、主に考古資料を収蔵する魚住文化財収蔵庫を建設したが、数年で収蔵場所がなくなる可能性がある。現在、資料の収集基準や受け入れのための選定委員会はない。

- 魚住文化財収蔵庫で埋蔵文化財関係の展示や、資料整理を行っているが、ラボ、ワークショップ、アトリエとしての機能を魚住文化財収蔵庫に集約して、役割分担することも考えられる。

(4)「登録博物館」への移行（資料8 参照）

【現状】文化庁では、博物館法上の博物館（登録博物館）に対して、博物館活動の支援（補助金、人材派遣など）をする方針である。ぶんぱくは現状、博物館法上の博物館（登録博物館）ではない。明石市内のもう一つの博物館である天文科学館も同様であり、両館ともに登録博物館への移行を予定している。登録博物館への移行には、博物館活動の範囲、分野の整理・整備が必要である。

現在、ぶんぱくでは、博物館業務のほか、埋蔵文化財業務や市史編さん業務を行っており、収蔵スペースのほか、病害虫管理、資料調査、展示準備、イベント開催場所など、博物館活動に必要な場所が不足している。

ぶんぱくが明石市の博物館としての役割を果たす上での課題

役割 1. 明石の歴史を後世に伝える を実施する上での課題

(1) すべての人にわかりやすい企画展等の実施 (資料9 参照)

【現状】明石の歴史、考古、本市にゆかりのある作家等に関する企画展を年間 4 回程度実施している。観覧者が固定化、高齢化しているとともに、内容が専門的であるため、一般の方(特に子ども)には理解が難しい状況である。

また、視覚だけでない感覚を用いて、理解が進む展示なども必要であると考えているが、体験型展示が少ない。

なお、常設展示室は、開館以来、大規模なリニューアルができておらず、一度来館した方に、再度来館してもらえるような取り組みが必要であると考えている。

わかりやすい展示のために、ぶんぱくの市学芸員と指定管理者学芸員がワンチームで対応できていない。

- 展示だけが博物館活動を市民に届ける方法ではない。資料貸出で、博物館活動を届けたい人に届ける方法を持つことも大事。
- 明石の歴史を後世に伝える手段は展示だけではない。ぎふメディアコスモスで展開していた連続的歴史講座(「大人の夜学」「子どもの昼学」)のような、今の人たちにおもしろい内容の講座が効果がある。
- 博物館で開催する講座の参加者はテーマをよく知る詳しい人が多い。図書館などのほかの文化施設のメンバーともう少しゆるい歴史学講座を企画し、語り口を工夫したり、民間の専門人材に依頼するなど、歴史を身近なものにできる。2～3回の講座では受講者の変化は少ない。10回くらい続けることでやっと変化が現れる。
- 連続講座の内容の配信やブックレット化が、博物館の知見の集積となる。展覧会の図録は専門的で小学生にはわかりづらいので、文体・デザインを工夫して、小学校のテキストとしてそのまま使えるようなものがあるとよい。

(2) 博物館の収蔵資料の現状調査と整理、方針策定、情報登録、デジタル化と公開

(資料10 参照)

【現状】現在、ぶんぱくには約 12 万点の収蔵資料があり、約半分の資料の整理と情報のデータベースへの登録が済んでいるが、資料全体の把握と整理ができていない。また、データベースに登録できている情報には、近年のデジタルアーカイブ化に対応できていないものがある。加えて、資料の整理方法や登録に関するルールがあいまいとなっている。

博物館資料に、博物館に来られない人も含めてアクセスできるようにするとともに、市民自身が調査・研究する環境を整えるため、そして、研究者への資料提供のためにも、デジタルアーカイブの整備が必要であるが、資料整理と情報登録、そしてデジタルアーカイブに長けた人材の不足により、資料の整理とその後の公開整備が遅れている。

- ぶんぱくの情報が見に行かないと見られないのではなく、何気に、意識せずに市民の目に入るようにすれば、市民とぶんぱくとの距離が近くなる。市民広場や新庁舎にミニ展示や検索コーナーがあり、大画面で紹介しているとふとした時に目に入る。
- 博物館資料をデジタル化する前に、収蔵資料の現状調査と整理、加えて現時点での資料収集の方針(分野、どのような資料を収集するのか)を考えておく必要がある。デジタ

ル化もその方針に沿って実施するべき。

(3)出張展示・アウトリーチ事業の充実（資料11 参照）

【現状】企画展や明石の歴史に関する出前講座のほか、講師派遣や明石公園等で開かれるイベントへの参加などを通じて、広くぶんぱくの活動を周知しているが、ぶんぱくに来館しにくい方へ届くような活動や他の施設との連携が十分ではない。

- ぶんぱくへの市民認知を作るためにはいくつかの場所でのフックとなる展示が必要。新市役所、明石駅前、西明石駅前などの子育て支援施設、図書館やコミュニティセンターなどで、新住民へ、子育て世代へ、シニアにそれぞれメッセージとなる展示を持ちたい。
- ぶんぱくに行けばもっとわかる、というインデックス的な展示については、資料が損なわれず、本来の目的にかなう場所に設置することが重要である。
 - ・新市役所にふとん太鼓や船を移設展示
 - ・図書館、西明石のコミュニティセンターなどで巡回的な展示スペース確保など
- 巡回的展示スペースの確保は重要。
- 魚住文化財収蔵庫で実施している埋蔵文化財に関する展示を企画展と捉えると、市西部での実施実績となる。西部市民会館・西部図書館と連携して、西部地区の市民を惹きつけることができるのではないか。そうすることで、今ぶんぱくで年4回実施している企画展のうち、2回を子ども向けに特化して、「子どもが歴史を遊びながら学べる企画展」「歴史の入り口の低年齢化」「歴史好きの子どもを作る」内容に振り切ることができる。
- ぶんぱくは市内文化施設のなかで、「歴史を伝える中心拠点」「歴史のアーカイブ 拠点」として、他の施設と協力・連動・接合していくことで、広がりを持つことができるのではないか。

役割2. 明石の文化の発信と醸成 を実施する上での課題

(1)博物館や文化への理解をひろげる特別展の実施（資料9 参照）

【現状】有名アーティストによる質の高い芸術等を紹介する特別展を年間2回実施している。特別展により、初めて「ぶんぱく」に来館する方も多いが、次の特別展や企画展の来館につながらず、多様な文化に触れる機会の創出ができていない。

(2)市内企業等とのコラボ・連携（資料12 参照）

【現状】市内や近隣の団体・業者と連携して、イベントやワークショップを開催し、展覧会オリジナルグッズ等を作成しているが、担当者の交代等により、展覧会ごとにばらつきがあり、継続した取り組みが難しい状況である。
また、市内企業の歴史を紹介し、企業と連携した展示はできていない。

- 図書館や書店など博物館とは異なるノウハウを持つ主体との共同開発チームで グッ

- ズを開発すると、これまでと異なる視点で異なる想いが込められたグッズが生まれる。
- 明石にはいい企業がたくさんある。展示や市内企業の紹介で、市内企業のよいところを来館者に知ってもらうことで採用につながるなど、win-win の関係が作れる。

(3)市民の創作・研究成果の発表の場としての支援 (資料13 参照)

【現状】ギャラリー利用者が固定化・高齢化している。加えて、新たな利用希望があっても、当館の事業と市の主催事業等によって、一般利用者が利用できる期間が少ない。

市内にギャラリー機能のある施設が少ないため、市民の創作活動の発表の場の確保が難しい。

ギャラリーを使用するほどのスペースが必要でない方が、気軽に自分の創作・研究成果の発表ができるようなニーズにも対応したい。

役割3. 市民をつなぐ を実施する上での課題

(1)市民が博物館の運営に関わることができる仕組みの構築 (資料14 参照)

【現状】現在、ぶんぱくには、天文科学館のような「友の会」はない。また、市民自らが明石の歴史等を調べるための場所・資料等がない。

一方、2024 年度に実施したミュージアムプレイヤー養成講座の修了生約 20 名が博物館活動を開始している。

今後、ぶんぱくが市民の交流する場を提供し、ステークホルダーを増やしつつ、市民が市民をつないでいく体制、交流促進を担う人材の確保が必要である。

- ぶんぱくが、学生が博物館や美術館の運営を学ぶ場となればよい。近隣の明石高校美術科と連携してカリキュラムをつくり、将来のキュレーター、芸術を発掘してプロデュースする人が明石で育つとよい。
- 運営協議会の設置が必要。協議会メンバーは有識者だけでなく、博物館が好きな人も含める。協議会のメンバーがぶんぱくのファンになり、定期的な外部に開かれた場となる。
- ワークショップなどの方法で市民の意見を聞くことも大事だが、その場合、普段来館しない市民の意見を聞けるように、準備期間をきちんと設けて実施してほしい。

(2)体験プログラムの実施 (資料15 参照)

【現状】子どもたちが、文化や博物館に出会い、ファンとなっていくための取り組みが必要と考えている。

現在、体験プログラムを実施しているが、受講後、ぶんぱくに関心を持って、子どもたちが、博物館に関係した活動を行えるような仕組みがない。

(3)くつろぎ・交流・キッズスペースの整備

【現状】ぶんぱくの隣の別館にはレストランがあるが、本館は、原則として飲食禁止となっており、来館者がゆっくりと過ごせる場所が館内にない。

ミュージアムグッズは、展覧会や博物館のメッセージを家にまで持ち帰ることが可能となるため、商品数を増やし、ショップエリアの充実を図りたいが、現在、物販が受付と同じ場所にあるため、陳列できるスペースが小さく、収蔵品に関連した商品の開発も進められていない。

また、駅前の子育て支援施設は常に満員であるため、子育て層(特に未就学児)のために、博物館ならではの子どもの居場所づくりを推進できればと考えている。現在の子ども向けボックススペースに加え、子どもと一緒に過ごすことができるスペースや休憩室、救護室、授乳室なども必要と考えている。

- 現在の館内には新たな要素を追加できる余地に乏しい。奥まっている部屋など運用の難しい場所が多い。館内の展示スペースの整理・再編が必要ではないか。新たな活動のためには引き算の要素も重要になる。
- ロビーに交流スペースを確保してはどうか。それがカフェであるかどうかは別としてくつろげる場所として何が必要か考えるべき。
- 交流スペースの設置については、ターゲットの層を絞り、そのターゲットに合うようなスペースを設置するなど、誰をターゲットとして何を成功と考え交流スペースを設けるのか、設置する以前から決めておく必要がある。
- ぶんぱく駐車場のスペースに分館を建てて、博物館活動といこいのスペースを作ること、ぶんぱく来館へのハードルが下がるのではないかと。駐車場対策としては、最寄り駅と天文科学館、ぶんぱくとのシャトルバスの運行が考えられる。
- 交流の場として、いろいろな人が集まる場をレストランのみに負わせるのは難しい。メニュー開発しても、レストランに行くにはお金がかかる。気軽に行けるカフェが望ましい。
- 移動式のソファなどで店内レイアウトを変えられるようにして、レストラン(カフェ)を居心地のよい場所にする。「変わった」と外から気づかせるためにも大事に必要な取り組みである。
- 小展示室は活用されていないように見える。また平和資料室も独立させず展示室内に組み込んだ方が見てもらえるだろう。体験展示室も死角になり、活用しづらい場所になっている。大会議室、レストランと何かコラボできるかなども検討した方がよい。
- 現在、国内に13館あるおもちゃミュージアムでは、生涯木育をキーワードに博物館活動を行っている。木育が子どもたちに与える影響は大きい。このような活動もできればよい。(事務局注：豊田市博物館にも木育スペース有)

その他 (提言書の内容を実現させるために必要なこと)

- ・主な取り組みを進めるための、具体的な年度計画の策定
- ・計画等の進捗管理や評価を行う組織の設置
- ・ぶんぱくと他の文化施設との役割分担の整理